



## 1 護衛

まだ完結ではありません。

少しずつ更新して章を増やして行く予定です。



アースルーランドの王子ソルジェニーは

国の古くからのしきたり、『光の王』の花嫁に選ばれた。

本来女性の役割なのに、この時女性の継承者が居なかった為に。

その特異な事例の為、身内を尽く早く亡くした幼い彼に

城の者達は腫れ物のように扱い、彼はいつも孤独だった。

そんな時、彼は護衛のファントレイユに出会ったのである…。

†// : 登場人物紹介 : // †

ファントレイユ...19歳。ブルー・グレーの瞳。グレーがかった淡い栗色の髪の毛、美貌の剣士。

王子の護衛をおおせつかる。近衛連隊、隊長。

ソルジェニー...アースルーリンドの王子。14歳。金髪、青い瞳。

少女のような容貌の美少年だが、身近な肉親を全て無くし孤独な日々を送っている。

## 1 護衛

ソルジェニーは本当に、気落ちしていた。

古くからの契約、アースルーリンドの王子の軍事教練を受け持つ『風の民』との、その年の講習期間が終わってしまい、王子である彼は『風の民』の谷から城に戻されてしまったからだ。

彼は、家族のように扱ってくれる『風の民』達と離れ、本来の居場所である城に戻る事がうんと寂しく、心細かった。

なぜなら彼の父であるアースルーリンドの王は、彼が産まれた年にとっくに亡くなり、彼の母親も直ぐに事故で他界。

その上父に代わって女王として君臨していた祖母ですらも、彼が五歳の時にこの世を去り、彼に愛情を注いでくれる肉親が身近に一人も、居なかったから。

皆、慇懃無礼に礼を取って王子である彼に頭を下げるけど、彼に親しく声をかける者どころか、微笑みかける者すら稀で城の中に彼の居場所は無いように感じられて、とても孤独だった。

...『風の民』の荒れた地の粗末な住まいと違い、ここには不自由なんて全く無かった。いつだって美味しい食事が用意され、布団はいつもふかふかだったし衣服は毎朝召使いが、整えてくれた。

にも関わらずソルジェニーは、親しみを感じない教育係と世話役に囲まれて毎日、息が詰まりそうだった。

そんな時だった。ファントレイユに、出会ったのは。

もう14にもなったのだから、自由に城下を歩き回りたいと申し出たら、大臣達が護衛役を付けてくれた。

近衛連隊の騎士の中でも、彼なら、宮廷でも如才無く過ごせ、気の利いた男で腕も確かだと言われ、初めてファントレイユに会った。

その時ソルジェニーは戸口から、昼の陽光溢れる室内に彼が、金糸で飾られたクリームがかった衣服を纏って姿を現し、自分の方へとゆっくり歩み寄って来たのを、不思議な気持ちで見つめていた。

溢れる光の中の彼は、光の加減でグレーに見える、たっぷりとした艶やかな栗毛を首に巻き付けるように肩の上でほんの少し揺らし、その際立つ美貌の細面の上に、微笑を浮かべていた。

あんまりその立ち居振る舞いがすらりと美しく、仕草も所作もが優雅で気品溢れ、一瞬見惚れてしまったように、思う

。姿の綺麗なご婦人はこの宮廷で幾人にもお目にかかったが、これ程優雅で隙無く美しい男性は、初めだった。

ファントレイユには人を引きつける独特の雰囲気があって、その透けるように明るく輝くブルー・グレーの瞳のその美貌で微笑みかけられるとつい、彼に魅入られ、見惚れてしまい、それはうっとりとした気分させられる。

...宮廷作法の、教育係だと紹介されたりしていたらきっと、こんなに驚いたりはしなかったろう。けれど彼は近衛連隊に所属していて、護衛なのだった。

気づくと彼は、自分より背が低く少女と見まごう顔立ちの、薄い金の長い髪を背に流す、青い瞳をしたソルジェニーに少し屈んで伺うように見つめ、うっとりとする微笑を口元にたたえて告げた。

「近衛から派遣された貴方の護衛です。

ファントレイユと...そう呼んで頂ければ結構。それで...」

彼の声は、その容姿に似合わずびっくりする程通った声だった。

相手に自分の意思を、通すのに慣れた声色。

そう言えば『近衛連隊の隊長を務めている』と聞いていたのを、ソルジェニーは思い出した。

あんまり驚きを伴う表情で自分を凝視する王子の様子に彼は気づくと、とうとう苦笑してささやいた。

「...期待外れでしたか？

もっと屈強な男をお望みのようだ」

そう告げる彼の声は羽毛のように柔らかく、その癖隙が、無かった。

間近で良く見ると、確かに鍛え上げられた武人のような、引き締まったしなやかな体付きだった。

ソルジェニーは慌てて首を横に振るとつぶやいた。

「...貴方のように綺麗な男性は初めて見たので、驚いただけです」

だがファントレイユは朗らかに、笑った。

「...冗談でしょう？確か近衛一の使い手のギデオンは、貴方のいとこの筈だ。

貴方と親交も厚いと聞いています。

彼がどれ程近衛で目立つか、貴方はご存じ無い？

彼と比べて私の容姿なんてどれ程のものです？

彼を見慣れている貴方が私に、そんな事を言うなんて！」

言われて、彼はいとこのギデオンを思い浮かべた。

そう言えば彼も、近衛だった。

確かに同じ血を引くギデオンは、自分に良く似た雰囲気顔立ちで、金髪に青緑の瞳の素晴らしく目立つ容貌の上、その顔立ちは女性のように綺麗だった。

ソルジェニーは慌てて付け足す。

「あの...つまり、身内以外で...という意味です」

ファントレイユはようやく、ああ。と、うっとりするような美貌の上に微笑みを浮かべ、頷く。

ソルジェニーはその微笑に見とれながらささやく。

「それに貴方はギデオンとは、全然雰囲気違います」

ファントレイユは少しからかうように覗き込むと

「...そりゃあ彼は本当に、あの容姿に似合わず戦うのが大好きで、剣を放さない猛者ですからね」

「...貴方は違うんですか？」

ソルジェニーが尋ねると、ファントレイユはまた、うっとりするくらいの微笑をたたえ微笑んで、告げた。

「...戦う以外に楽しい事はいっぱいあるでしょう？多分そこが、ギデオンとは決定的に違うんでしょうね。

もっと腕の立ちそうな男をお望みなら、大臣にそうおっしゃって頂いて結構ですよ？」

「...でも貴方もとても、腕のいい方だとお伺いしています。

まさか剣の苦手なお方を大臣達も、私の護衛にしたりはしないんでしょう？」

ファントレイユは屈託無く笑った。

「...そりゃあ、近衛で隊長なんてしていたら部下の手前、剣が使えなきゃ話になりませんが」

「...それに貴方をお断りなんてしたら、貴方の立場上でも、それはお困りになるんでしょう？」

このソルジェニーの言葉に、ファントレイユは社交用の仮面を外し、優しげで気遣う表情を甲斐間見せた。

「...噂通りの、お優しい方だ。でも私の心配より貴方のお気に召す相手をお選びになる事です。

ご一緒に過ごす時間が、結構ありますからね」

ソルジェニーはこれを聞いて、心が震えた。

彼のその言葉が、自分の立場より本当にソルジェニーの気持ちを優先し気遣ってくれると、感じたからだった。

儀礼的に、もしくは責務上彼を気遣う者達は大勢いたけれど、心から気遣ってくれる相手が、今までこの城の中に居なかった事にソルジェニーはその時になって初めて、気づいた。

ああ...だから...

唯一一番身近ないとこのギデオンと会った時、あれ程嬉しく、彼が去った後とても寂しく感じたのはそのせいだったのかも知れない。ギデオンは身内だから特別なのだと思っていた。

けれどそうじゃなくて彼を気遣ってくれる相手がこの城の中で、ギデオン唯一人だけだった...。今までは。

それでソルジェニーはそのまま自分の心を、彼に告げた。

「...私は貴方が護衛で、とても嬉しいです。

貴方もそう思って頂けると嬉しいんですけど」

ファントレイユはとても優しげな表情で柔らかく微笑んで

「...そりゃあ...

近衛と来たらそれは殺伐としていますから、宮中でこんなに優雅で楽しい職務を努められるのが、嬉しくない筈ありませんよ。

貴方のご性格は本当に、申し分無くお優しい方ですし」

そう誉められてソルジェニーは思わず、頬を染めて頷いた。

彼に気に入られた事がこんなに心が弾んで楽しい事だなんて思わなかったし、誰かに気に入られてこんなに嬉しい事は、今まで無かったからだった。

## 2 宮中

---

ファントレイユと並んで外出すると、途端に人目が集まってくる。  
やっぱり彼に見惚れるのは自分だけじゃないんだ。  
と、ソルジェニーはそっと横を歩く彼を、見上げた。

たっぷりのグレーがかった栗毛が、肩の上で波打つように揺れる。  
面長の、けれどもとても綺麗な形の頬と顎をしていて、鼻筋が通り、何より顔立ちが綺麗だと言う他に彼にはどこか輝きを集めたような雰囲気があって、どう考えても近衛よりこの宮中に居るのにふさわしい、文句無しの優雅な姿だった。

目前の豪華で壮麗な建物を抜け、広い中庭に出る辺りでご婦人の一団に出くわす。  
色とりどりの衣装を着こなし、身分ある方ばかりでそれは華やかだったが、ファントレイユと並んで進むと彼女らの、呆けたように見惚れる視線が一斉に彼に、注がれた。

ソルジェニーはつい、彼女らの視線を追いかけて隣のファントレイユを見上げたが、彼は見つめられるのに慣れている様子で、7人程居る女性達の視線を一身に浴び、それは優雅に、にこやかに彼女達を見つめ返し、通り過ぎ様それはうっとりするような笑顔で微笑んだ。

彼女達の頬が染まりファントレイユのそのあまりの優雅な男らしい美貌に、通り過ぎたその後ろから一斉に感嘆のタメ息が、漏れる。

ソルジェニーは初めての事について、再びファントレイユの様子を伺ったが、彼にとっては日常で、何でもない事で、当然で当たり前で、どうって事無いようだった...

見つめ続けているとファントレイユの視線が前に、注がれる。  
黒髪の、それは美しいご婦人が彼を、見つめていた。

隣に居るのは大臣の一人で、どうやらその黒髪のご婦人は彼の妻だと紹介された事を思い出す。  
随分お若い奥方をお迎えになったと、確か侍従達がそう、噂していた記憶があった。

大臣はソルジェニーを見つけると、少し頭を軽く下げて礼を取り、その後その場を離れた。  
...いつもの事だが彼らは大抵ソルジェニーに捕まったり、長く話したり、質問をされる事を怖がっているようで、用が無ければ直ぐにその場を、立ち去るのが習慣だった。

仲違いしている訳でも無い相手にそんな態度を取られる事に、ソルジェニーはそれは気落ちしたが、ファントレイユは大臣が場所を外した事は嬉しいようだった。  
...ご婦人は夫に、ついて行かずその場に、残ったからだ。

彼女はファントレイユに微笑みかけ、当然とばかりにその手を差し出す。  
途端ファントレイユはそれは優雅に微笑み返すと、その差し出された手をそっと取り、軽く膝を折ってその真っ白な手の甲に、軽く口づけた。

あんまり素晴らしい仕草で、ソルジェニーはご婦人にはこうやって礼を取るのか…。と、まるでお手本を見るように、ファントレイユの流麗な動作に見とれた。

「…王子の、護衛のお方だと夫にお聞きしていますわ。

…近衛連隊にいらっしゃるとか…」

ファントレイユは神妙にそっと、俯く。

「…今日が初仕事ですが」

「…でも護衛をなさるならこれからも度々、お目にかかれますわね？」

ファントレイユが美貌のその面を上げて、婦人に微笑み返す。「…王子が私を召して下されば。いつでも」

だが彼女の夫の大臣は、女性なら大抵色めき立つその色男と話している妻が気に入らないらしく、しきりに彼女に『早くこちらに來い！』と、少し離れた場所から頭を振りまくり、合図を送った。

「…夫君がお呼びのようだ」

ファントレイユがチラリとそちらに視線を向けてつぶやくと

「…そのようね」

彼女は素っ気なく言い、直ぐソルジェニーに振り向くと途端、にっこりと微笑んだ。

「…また、お会い出来ると良いのですけれど」

そして、そっ、と視線をファントレイユに残しながらもその場を、立ち去った。

ファントレイユがその視線を受け止め、身分の高いご婦人に対しての礼を取り、優雅に頭を下げた。

二人の様子を見れば、世事に疎いソルジェニーですら、その言葉は勿論自分に向けられたのでは無いと、解った。

ファントレイユを護衛に連れだした自分に、出会いたいのだとそう、彼女はソルジェニーに告げたのだ。

あんな美人で豊満な、それは綺麗な胸をした女性にあんなに好かれて、ファントレイユがさぞ、心を動かされたのでは無いかと様子を伺ったが、彼は全然そんな素振りを見せず、自分を見つめているソルジェニーに、先に進むよう視線を送って促した。

ソルジェニーはファントレイユの横に並んで歩を進めたが、その素晴らしい美貌の護衛はその後毎度、ご婦人に出会う度にこんな光景を、繰り返した。

城の中を歩いただけなのに、ソルジェニーは人の視線を浴び続け随分と、疲労を感じた。

今まで一度も、無かった事だ。

人々は大抵ソルジェニーを怖いもののように避け続け、出会うと殆どの者が礼を取る振りをして頭を下げ、王子に話しかけられまいと視線を下げてまま、逃げるようにその場を立ち去って行ったからだった。

王子の疲れた様子にファントレイユは気づくと

「そこのベンチに、掛けましょうか？」

と屈んで彼の耳元にささやいた。

ソルジェニーが頷く。

そしてベンチに掛けるとその側に、彼の視線を遮らないよう控え目に立つファントレイユを、見上げ不思議そうに尋ねる。

「…どうして貴方は、掛けないんです？」

空いている隣の空間を目で差すと、ファントレイユは真顔でささやく。

「...護衛は普通、ご一緒に掛けたりは致しません。

何かあった時に行動出来なければ、護衛の意味が無いでしょう？」

ソルジェニーはファントレイユがあんまり人々の注目を浴びるので、彼が護衛だと言う事をすっかり忘れていた自分に気づいて、ああ。と頷いた。

「...でもここはまだ城の中ですから、出来れば隣に座って話し相手になって下さると、嬉しいんですが...」

ファントレイユは城の中だからこそ、職務を果たしている姿を人に見せたいようだったが、ソルジェニーの、とても話し相手の欲しい、物寂しそうな風情に目を止めてつぶやいた。

「ここからでもちゃんとお声は聞こえますし、話し相手は務められますよ？」

ソルジェニーが見上げるとその美貌の騎士は、それは優しげに微笑んでいて、ソルジェニーを有頂天にした。

「...あの...私は全然軍の仕組みが、解らないんですが、どうして貴方は宮仕えをなさらず近衛にいらっしゃるのです？」

聞かれてファントレイユは暫く黙った。

が、ゆっくり口を開くとつぶやく。

「...そうですね。宮仕えが出来る立場には居ましたが...」

そして、自分を何うソルジェニーを見やると、微笑みを浮かべる。

「...そんなに不思議ですか？私が近衛に居る事が」

その素晴らしい美貌で見つめられ、ソルジェニーは躊躇ったがささやく。

「だって、ここの誰よりも優雅でいらっしゃるから...。

宮廷作法の教育係が、貴方と比べたりしたら不作法に見えてしまう程です」

ファントレイユは苦笑した。

「それは...。

作法の教育係に、恨まれそうですね」

「...ギデオンのように、戦うのが大好きだからですか？」

とてもそんな風には見えなかったが、取りあえずそう尋ねてみる。

「まさか...！

そんな風に、見えますか？

私は血を見るのも、殴り合いも大嫌いです」

やっぱり...。とソルジェニーは思った。

でもそれならますます、不思議だった。

「それでも、近衛が良かったのですか？」

ファントレイユは肩を、すくめる。

「...もし私が近衛で隊長をしていなかったら、多分もっとたくさんの男にやさ男となめられて、決闘を、ふっかけられていたでしょうしね」

ソルジェニーは彼にそれは不似合いな、“決闘”という言葉につい、驚いて訊ねた。

「...決闘を...なさるのですか？」

ファントレイユはいかにも、不本意のようにつぶやいた。

「勿論、好きでしている訳では、ありませんよ。

大抵の男達は自分の惚れたご婦人が、私の気を引こうと色目を使うのが気に入らず、好んで私に突っかかって来るんです」

ソルジェニーはこれまで城の中で彼に見惚れる女性の、その数の多さを考えてつぶやいた。

「...じゃあ、ひっきりなしに決闘していなくては成りませんか？」

「...近衛の隊長に、決闘を申し出る相手は限られます」

「...それで...あの...。

やっぱりお怪我を、なさったりしますか？」

ソルジェニーが、それは心配そうな表情を見せたので、出会って間もない幼い王子に心配された事が彼は、それは嬉しい様子で軽やかに微笑み、言葉を返す。

「近衛の隊長が色恋沙汰の決闘で怪我なんかしたら、首が飛びますよ！

...幸い私は、今だに隊長で、いられます」

ソルジェニーは、少し呆れた。

彼はそれは遠回しに

“自分は決闘で、怪我なんかする程剣の腕は劣っていない”

と、告げたのだ。

その言い回しもあんまり控えめで、ソルジェニーは彼がなぜ自分の護衛に選ばれたのか、理解出来たような気がした。

彼は確かに人目を...特にご婦人の...引きまくったが、ソルジェニーに対するその態度も言葉遣いも、とても控え目で気遣いに溢れていたし、これ程浮ついた視線を送られ続けても職務をきちんと理解して遂行している所も...申し分無かったからだった。

### 3 ギデオン

数日彼を続けて召して城内を歩いたが、この素晴らしい美貌の護衛は行く先々で女性の熱烈な歓迎を受け続け、ソルジェニーはすっかりその様子に慣れた。



ある時大公爵夫人が、滅多に顔を出さない城の大広間に、顔を出した。

その、煌びやかで豪華な衣装と、尊厳を示そうとする少しいかつい顔のご婦人はソルジェニーにとっても記憶のある姿だったが、以前会った時はそれは丁重に挨拶され、しかしソルジェニーが口を開こうとすると途端、きびすを返して彼の目前を、去った。



...しかし、ファントレイユと一緒にだと、彼女の態度は違っていた。

ソルジェニーに、やはり丁寧に機嫌伺いの言葉を述べ、しかし視線は後ろに控えるファントレイユに、釘付けだったからだ。

「護衛の方も、大変な勤務ですわね。お相手が、王子ともなると。

...ところで護衛の仕事の、空き時間は何をしていますの？」

ファントレイユはいかにも臣下と言う態度で、それは静かにソルジェニーの後ろで目を伏せていたが、婦人に話しかけられてその面を、上げた。

ソルジェニーもつい彼を見つめたが、彼が面を上げると聡明そうで隙の無い、文句のつけ所の無い美貌のそのブルー・グレーの瞳が、一瞬煌めくような輝きを放って見え、あまり綺麗でソルジェニーですら呆けた程だったが、ご婦人にとっては尚更だった。

大公爵夫人の、タメ息が漏れた。

が、ファントレイユは臆する事無く密やかだが力のある声でこう告げる。

「...これでも近衛で、隊長を努めておりますので、お召しが無い場合は部下の世話や軍務が、ございます」

婦人の頬が彼に見つめられて染まる様子に、ついソルジェニーは目を、まん丸にした。

それ程年輩では無いにしろ充分熟年で、身分を武器のように纏った威厳の塊のようなご婦人のそんな様子は、初めて見たからだった。

彼女は少し、感動で震えるように掠れて狼狽えたような声音で、つぶやく。

「...まあ...

そんな危険なお仕事で無ければならないの？ご身分は？」

この明け透けな言葉にしかし、ファントレイユは眉をしかめる様子も無く、淡々と返した。

「...候爵でございます」

この時アースルーリンドの宮廷では、公爵以外の身分は皆下等で、虫けらのように思われていたから、ファントレイユはこの大公爵夫人の同情を、いたく買った。

「...ああ、それで.....」

危険なお仕事に、付かなければならなかったのね？

でもご努力が報いられて、王子の護衛に付かれた事、本当によろございましたわ。

そうね。お望みなら、もっと危険も少なくそれは貴方にふさわしい役職を、私ならご紹介出来るのだけれど...

そして途端に、ファントレイユに色目を送る。

ソルジェニーはそのご婦人の様子に目を、ぱちくりさせたがファントレイユは慣れているのか、丁寧に頭を下げ返答をしようと、口を開いた。

「...こんな男だが、近衛では大変役に立つのでね。」

出来れば職を、変わって欲しくないのだが...

横から口を挟んだその声の主に、皆が振り返った。

勇敢で、さわやかな意思の強い声色は、ソルジェニーは聞き覚えが、あった。

そこに居たのは、やはりギデオンだった。



見慣れた彼だったが、その登場は、大公爵夫人を、たじろがせた。

ギデオンはいつも通り、それは人目を引く見事な波打つ金髪を背迄たらし、色白の小造りの小顔の上のその宝石のような青緑の瞳を煌めかせ、瞳の色と同じ青緑色のピロードに金の豪華な刺繍の入った上着をその身に付け、美女のような女性的な顔立ちとは裏腹の、尊厳溢れる堂とした態度でそこに立っていた。

彼はソルジェニーのいとこで、彼の母親は以前、王位継承者だった。

それに、彼の母親が継承権を放棄しなければ、ソルジェニーに代わって王子で次期国王たる地位の、それこそ大貴族ですらひれ伏す、それは身分の高い王族だ。

婦人は、『軍神』と呼ばれる代々右將軍を継いで来た家系の、その厳しい武人の前から慌てて罰が悪そうに色気を隠し、軽く礼を取ると用があるので...と、そそくさとその場を立ち去って行った。

ソルジェニーは暫く呆けたように、その劇の一部のような展開に言葉を無くして、ギデオンを見つめた。

ギデオンは困惑した表情を浮かべてその、小さいとこをそっと見つめ、ファントレイユに告げた。

「...君といるとソルジェニーは、いつもこんな事に、巻き込まれているのか？」

ギデオンが言うとファントレイユは素っ気なく返答した。

「...巻き込んで、いないつもりだが」

ギデオンはその大広間の周囲を見回し、女性達が、群れては遠巻きにファントレイユに注ぐ熱い視線を、呆れるように見つめ、ため息をつかばかりにファントレイユに向き直る。

「...君がここに顔を出すようになってから、随分浮ついたな」

ファントレイユはその美貌で、明るく微笑む。

「それは、光栄だ」

ギデオンの、眉が寄った。

「...誉めて、無い」

だがファントレイユは肩をすくめて言った。

「...それは、残念だ」

ギデオンに対して宮廷内では、大抵の者が大公爵夫人のような態度を取るのに、ファントレイユのその、全然彼に隠す様子の無い同等の口の利きように、ソルジェニーはなんだかとってもほっとした。

ギデオンは全然身分を気にしない男だったけど、周囲はそうでは無かった。

大抵、とても丁寧に彼に相対していた。

ギデオンはそれに何も言わなかったけれど、もどかしく感じているのを、ソルジェニーは知っていた。

だから対等の口を聞くこの護衛には、ギデオンも軽口を叩くみたいだった。

「...何しろ、君を推薦したのは、私だからな」

「...やっぱり？君のご指名だとは思ってはいたよ」

ファントレイユはそれは身分の高い大貴族にそう、告げた。

が、ギデオンは身分等相変わらず構う様子無くつぶやいた。

「...君は女性には、それは念入りに親切だが、部下に対しても評判が良い...

態度が柔らかく気が利くしで押したが、ここでは君の本領が、発揮され過ぎてソルジェニーに悪影響が無いか、心配だ」

ファントレイユはその彼の様子に、つい本音を覗かせて尋ねた。

「...ほう。どんな？」

「...君を一人占めしていると、ご婦人に恨まれないか？」

ギデオンの、その本心から心配げな声音に、ファントレイユはつい、くすくす笑った。

「...冗談だろう？」

この職務じゃなきゃ、私はここには顔は出せないと言えば皆、納得するさ」

ギデオンの、眉が途端にまた、寄った。

「...君はソルジェニーの後ろから巧妙にお気に入りのご婦人の気を引いて、それ以外のご婦人の興味が自分に向いて都合が悪くなった途端、職務だとか言ってソルジェニーの後ろに、隠れるつもりなんじゃあるまいか？」

ファントレイユはギデオンの疑問に、呆れながら言い返した。

「...それをするのは、当たり前じゃないか。

気の無いご婦人の、相手をする義理なんて私には無いし、第一その気も無いのに気を持たせるのは、相手に対して失礼だ」

ギデオンはファントレイユのこの隙の無い返答に、それは不満そうに腕を、組んだ。

だがファントレイユはふと、思い返してギデオンに微笑みかけると、口を開いた。

「...ああ。君に、礼がまだだったな。助かったよ。

...さすがの私も、彼女くらい大御所で身分の高い女性だと、あしらいかねる」

「...そうだろうな。どう見ても、君のタイプなんかじゃ、ないし。

...だが軍に関して私の言った事は、事実だ」

この言葉に、ファントレイユの瞳が急に、輝いた。

「へえ...！

君に、そんなに買われる程、私は軍に必要とされているとは思って無かった」

ソルジェニーが見つめていると、ギデオンは少し、声を落としてささやく。

「...現右將軍の、叔父達はそう思ってないだろうが、私は身分等気にしないからな...。

腕が立ち、頭の回転の早いお前のような男は、戦場で必要だ」

だがこれを聞いてファントレイユは慎重に、言葉を選んだ。

まるでギデオンの誉め言葉を、鵜呑みにして有頂天に、成る気なんて、無いように。

「...そうだな。私の身分では、君の取り巻きはとうてい務まらない。

最前線で、いつ命を落としても構わない、実戦型のようだ」

ソルジェニーは軍の中では身分の低い者達が、身分の高い者達に代わって、捨て駒のように使われて命を落としている話を、聞いた事を、思い出した。

だがギデオンはそんな男なんかじゃない。

彼の知っているギデオンは、断じて自分の盾に、身分の低い者達の命を使うような卑劣な男なんかじゃ、ない筈だ。

ギデオンが、途端侮辱されたように鋭い声で、怒鳴るように唸った。

「...皮肉なんかじゃ、ないぞ！」

その真剣な言いように、ファントレイユは神妙な真顔になると、常に身分の低い者達の代わりに、危険な場所へと志願し続けるそれは身分の高いこの男に、心の中で謝罪した。

「...解った」

勿論、言葉にはしなかったものの、滅多に地顔を見せないファントレイユの、真剣な真顔にギデオンは、納得したようだった。

彼に軽く、了承したと頷く。

ソルジェニーは途端に、ほっとした。

軍の中ではギデオンは、自分の知らない男になってやしないかと、それは心配だったので。

だがギデオンはソルジェニーに振り返ると、厳しい態度を一変させ、それは優しい笑顔で、少し屈んでささやく。

「やあ...。

挨拶すら、まだだったね」

ソルジェニーの表情が、ギデオンの声で途端に輝く。

「...会えて、嬉しいよギデオン！」

「...相変わらずかい？みんな、君には素っ気ないようだな。

...ファントレイユはどうだ？見た所、君の世話より、女性の相手で、忙しいようだが」

「...凄く、刺激的で毎日が、楽しい！」

この彼の言葉に、ギデオンの目が丸くなり、ファントレイユは横を、向いた。

ギデオンはチラリとその美貌の色男を盗み見て、つぶやいた。

「...それは...良かった。

じゃ、君は気に入ったんだな？」

「とても！...凄く！」

ギデオンの表情が、途端にほぐれる。

ファントレイユの視線が、今度はギデオンに、吸い付いた。

その派手で素晴らしく綺麗な外観とは違い、ギデオンは軍では、剣の腕が立つだけで無くそれは勇猛な猛者だったし、気に入らない相手はすぐ殴る乱暴者だ。

...その上身分迄、最高に高かったから、彼に逆らう相手は

『命知らず』

と、呼ばれる程だった。

...だが彼は不正は大嫌いで、身分の差別などしなかったから、身分が高いと言うだけで実力無く威張る貴族達を、それはとことんやり込めて、身分の低い者達にとって彼は、まるで英雄だった。

それに戦場で彼は誰よりもまっ先に敵陣に切り込み、その勇敢さで熱狂的な人気の持ち主でも、あった。

...その彼が、王子相手だと、見た事も無い程優しげな表情を、作る。

つい、ファントレイユが、喰い入るようにその、珍しい物を見つめている自分に、気付いた。

「...君は、王子相手だと随分優しげなんだな」

ギデオンは顔を上げると、それは意外そうにそうつぶやくファントレイユの、美貌の面を見つめた。

「...そうか？」

ファントレイユは途端に苦笑した。

「自覚が、無いのか？」

ギデオンの、眉が寄った。

「...ソルジェニーを見ているというのに、どうやったら自分の表情が見える。

鏡を使ったって、無理だぞ」

ファントレイユは、それもそうだな。と肩をすくめた。

ギデオンは王子に向き直ると、言った。

「...気に入ったんなら良かったが、彼で困った事があればいつでも言いおいで」

ソルジェニーの、表情が途端に、曇った。

ギデオンと良く似た面差し、少女のように可憐な出で立ちで、薄い金の髪を肩に垂らし、それは綺麗な青い瞳をした王子はいつもどこか心細げで、そんな彼の悲しげな表情に、ギデオンの胸がそれは痛む様子がファントレイユの瞳に映った。

「...でもギデオンはいつも、忙しいでしょう？」

だがギデオンは、それは優しげに微笑むと告げた。

「君が来ればいつでも時間を、作るさ」

そして、思い直したように、付け足した。

「まあ...そりゃ、十分な時間は、取れないかも知れないが」

だが、ソルジェニーはそれは嬉しそうにギデオンに微笑みかけ、ギデオンは満足げにその顔を、見守った。

だが彼はさて...!と腰を伸ばすと

「狸共と、ちょっとした会合が、あるんだ」

彼の言葉に、ソルジェニーの頭の中に疑問符が沸き上がったが、ファントレイユは顔くつつぶやいた。

「...大臣達か？それは大変だな」

「...奴ら、黒い腹を抱えて、本音を隠しやがるから話をするのに、気骨が折れる」

「...君のように、人の顔の裏を読むのが不得意な人間には、尚更だ。

...大臣相手じゃさすがの君でも、殴れないんだろう？」

ファントレイユが、心から気遣う様子で尋ねるが、ギデオンは俯いてつぶやいた。

「...拳を震わせて威嚇する事はあるが...

殴れないと、ストレスが溜まる...」

途端、ファントレイユが困惑したように告げる。

「...頼むから軍で、発散しないでくれ」

ギデオンは、タメ息混じりにつぶやいた。

「...極力、そうしているが、こう毎日が平和だとな」

ファントレイユはそっと、尋ねた。

「戦が起こって欲しいとか、思っていないよな？」

「...それは勿論、望んでいないが、私に突っかかってくる奴がまるで居ない」

ギデオンが、がっかりしたように俯くので、ファントレイユは呆れて肩をすくめた。

「...そりゃ、あれだけ殴れば、無理も無いだろう？」

ソルジェニーはその、とても綺麗な顔をしたギデオンの、軍での有様に、思わず口をあぐり開けた。

だがギデオンはいかにも不本意そうに腕組んで怒鳴った。

「...そんなに殴った記憶は無いぞ！」

ファントレイユが、タメ息混じりに言い諭した。

「...普通、数人腕自慢の男を殴り倒して顎の骨を折ったりしたら、たいして腕の無い男はみんな、君に対して用心するものだ」

ギデオンが、心底意外そうな顔を、ファントレイユに向けた。

「...まさか君もそうなのか？」

ファントレイユは思い切り、肩をすくめた。

「好んで顎の骨を折られる、馬鹿に見えるか？」

ギデオンは首を横に、振った。そして、思い直したようにファントレイユの耳元に顔を寄せて、ささやいた。

「...つまり私に突っかかる相手は、馬鹿なのか？」

ファントレイユは、今更何を言ってるんだ？という呆れ顔を、した。

「みんなそう思ってるぞ？」

「...それで私の前だと、みんな大人しいんだな」

ギデオンの、その落胆仕切った様子に、ファントレイユが心から怯えて、そっとつぶやいた。

「...つまらなそうだな」

「楽しい、訳が無い」

ソルジェニーが、二人の様子に、つい笑った。

「...二人共、とても仲が、良いんだね？」

ギデオンが眉をしかめた。

「...そうか？」

ファントレイユが、肩をすくめてつぶやいた。

「...そう見えるんなら、そうなんだろう？」

今度はギデオンが、肩をすくめる番だった。

が、ソルジェニーに笑顔を見かけると、また今度、と手を振り上げてその場を、立ち去った。

「ギデオンは、貴方の事をとても気にかけている様子だ」

その後ろ姿を見送った後、ファントレイユが王子に屈んでそう、優しく話かけると、ソルジェニーが微笑んだ。

「...いつも、とても気遣ってくれるから、お会い出来るのが楽しみなんです」

その笑顔が、まるで五歳の子供のように邪気が無く、頼り無げで、ファントレイユはギデオンの気持ちが、痛い程解って頷いた。

王子が、皆から避けられているのは、訳が、あった。

アースルーリンドには『影の民』と呼ばれる人外の者達を封じている場所が多数あって、この封印が破られて彼らがこの地に、這い出たりしたら、人間はたちまちその魔物に命を取られて、滅びてしまう。

封印をし、『影の民』を追い払う事の出来る者はやはり人外の、『光の国』の王だが、彼は王家の者と婚姻を条件に、光臨を果たす。

が、今世では直系に女性が生まれず、王子がその相手に選ばれたりしたのだから、皆は彼をどう扱っていいか解らず、ひたすら避け続けていたのだった。

また、迂闊に彼に色々聞かれたりして万が一王子が、『光の王』の花嫁なんて嫌だ、と家出なんてされたりしたら、国が滅びるのである...

故に皆、王子と口をきく事をそれは恐がり、心を注ぎ、迂闊に物事を教える輩はことごとく王子の側から離されたりしたから、彼がいつも孤独でいるのは、仕方無かったかもしれない。

だが、まだ幼い王子の、身の置き場の無い、心細げな様子や不安そうな表情に、心ある者ならば気につけない者は、居ない。

ファントレイユはギデオンの事を影でこっそり、“猛獣”と呼んでいた。宮廷内では確かに、それは上品な大貴族に、見えるもののその中味は間違いなく野獣だったし、今や軍の中では彼の外観に騙される者は既に、皆無だった。

が、王子にみせる気遣いに、ファントレイユは大いにギデオンを、見直した。

「まだ、出向きたい場所は、ありますか？」

ファントレイユは、そっとささやくように王子の意思を、促した。

王子は少し嬉しそうに微笑んで、ファントレイユにこう告げた。

「南の庭園を、歩きたいんです...」

あの、もし、貴方が良ければ」

臣下の自分に、それは気を使う王子を、ファントレイユは心から不憫に思った。

それに王子は、自分の言う一言で相手に嫌われないか、それは恐れていたのに、ファントレイユは何を言っても、嫌ったりはしないんだと彼に教えようと、心を砕いた。

そして出来るだけ優しく、彼がどれだけ我が儘を言っても何でも無いんだと、諭すようにささやいた。

「...勿論、お望みの場所に、いつでも一緒します」

王子がその美貌の騎士の、心からの申し出に、満面の笑みで応えたのは、言う迄も、無かった...